

くエメラルドの細道・とりかえばやものがたり異聞く

「そなたは。」

あらすじ

平安時代初期、西暦八一七年葉月（旧暦八月、現在の九月）、美濃の国は揖斐川上流の山頂の湖畔で、花嫁衣裳を着た娘夜叉が震えていた。夜叉は安八村の豪商の太夫の二女。百日つづく日照りで村人が苦しむのを見かねた太夫が、蛇に姿を変えた龍神に「雨を降らせたら、お前の望みを叶えよう」と約束を交わしたがために、恵みの雨を降らせ村を救った龍神の妻として差し出されたのだ。

その八〇〇年先の江戸時代中期、俳句紀行「奥の細道」の旅の途中、松尾芭蕉は弟子の曾良とともに、越後沿岸の親知らず子知らずの難所に差し掛かっていた。仙台に長く滞在して生じた旅程の遅れを取り戻し、長月（旧暦九月、現在の十月）までに美濃の国大垣へ到着したい芭蕉は、それまでに度々試してきた「時の風穴」をくぐり、一挙に美濃の国へ飛ばうと決意する。黒々と闇のように渦巻く風の中へ飛び込んだ芭蕉は、手を離れた曾良を残し、闇の彼方へ消える。

「時の風穴」をくぐった芭蕉は、平安時代の揖斐川上流の山頂の湖畔でわが身を呪う夜叉に向かって落下し、その衝撃のせいにか、もしくは意識下に平安の歌人が詠んだ歌枕を訪ねたい願望のせいなのか、二人の魂は入れ替わってしまう。芭蕉の姿になった夜叉を龍神が尾で飛ばすと、夜叉の魂が宿った芭蕉の体は、芭蕉を慕う弟子の曾良のもとへ行く。夜叉の魂と、龍神の嫁となる夜叉に宿った芭蕉の魂がそれぞれの体で覚醒し、その理不尽な状況に絶望する。

夜叉の魂は、曾良との旅で、肉体の主が俳聖と呼ばれる芭蕉であることを知り、甲賀のくノ一に襲われる災難に遭いながら、曾良が芭蕉に対し、師匠に対する以上の思いを抱いていることに気づく。また、芭蕉も、自分の魂が入り込んだ夜叉は、龍神の捧げものを自ら買って出た、心優しく勇気ある娘であることを知る。芭蕉は、旅を急ぐという自分の都合

だけで、時空を越えるという神をも恐れぬ所業を試み、夜叉の運命を狂わせたことに罪を覚える。

平安の世で、芭蕉は、龍神の背に乗り、柿本人麻呂など憧れの平安歌人たちが詠んだ「歌枕」の地を巡り、思い残すことはないと思う。龍神は、芭蕉が俳諧に懸ける情熱に感じ入り、芭蕉は、龍神の夜叉への恋慕の深さを知り、二人に友情（？）が芽生える。龍神は、心ひそかにある決意をし、最も位の高い龍神、九頭龍大神に会い、芭蕉の魂を江戸の世に送り返す力を得ようとする。と、同時に、愛おしい夜叉の魂を平安の世に戻したいと願いながら。

九頭龍大神の九つの心は、厳しく芭蕉を追及する。が、芭蕉が純粋な俳諧の求道者であり、時空の風穴をくぐる力を悪用する邪心は無いことを見抜いた大神は、龍神に「選ばれし者である芭蕉を江戸の世に戻せ」と告げ、自ら嵐を巻き起こすと「時空の風穴」を創り、二人を時の彼方へ送り出す。

その頃、江戸の世では、曾良が、ホームシックを患う夜叉とともに親知らず子知らずの海岸を再び目指していた。芭蕉が消えた地点に戻り、一か八か「時の風穴」をさがそうと決意したのだ。芭蕉とつないだ手を離した岩壁まで何とかたどり着いた二人は、穏やかな日差しと静かな海を前に、芭蕉は単に波にさらわれただけなのかもしれないと絶望の思いに包まれる。

夕闇が迫るころ、夜叉は、空にひと際強く光る星を見る。それが、自分が龍神の湖のほとりで最後に見たのと同じ星だと気づき、叫び声をあげると、にわかにかき曇った空から雷鳴がとどろき、渦巻と共に夜叉の姿の芭蕉が龍神の背に乗って現れる。夜叉が龍神に向かって手を伸ばしながら、渦に飛び込んだその瞬間、空から火柱のような雷鳴が走り、辺りは真っ白な光で包まれる。激しい雷鳴が鳴り響くなか、曾良は気を失う。

夜叉が目を覚ますと、そこはあの湖の畔、大縄が結ばれた岩の上だった。自分の体が元に戻っていることを喜ぶ夜叉だが、傍らには体中に傷を負った若者姿の龍神が横たわっていた。龍神は時の流れを往復するな

かで持てる力を使い切りポロポロになっていたのだ。龍神は最期の力を振り絞って夜叉を抱きしめると、息絶えた。

時は流れ、元禄二年葉月（現在の九月）、福井の気比神社参りの後曾良は腹をこわし、床に臥せる。芭蕉は、伊勢長島の曾良の縁者に文を送り、曾良の迎えを依頼する。曾良は芭蕉と道を分かつことが辛いと涙を流し、これまでの旅を振り返るが、芭蕉には、実は越後からの記憶が無かった。

曾良と分かれ、美濃大垣を目指す途上、今庄の茶屋で聞いた、世にも美しい池を無性に見たくなった芭蕉は、予定を変えて、福井今庄から山を越え、美濃の里へ抜けようと決める。

半日以上道なき道を登り、日が山影に沈みかけたころ、目の前に紺碧の湖が現れる。その美しさに息をのみ、しばし畔の岩に腰かけていると、湖の中央から水柱が上がり、紅色の龍が現れた。芭蕉は腰を抜かすが、鱗に覆われた体をくねらせた紅の龍は、長い首を芭蕉の鼻先まで近づけてきた。龍の目は長いまつ毛に縁どられており、驚いたように芭蕉を見つめる。

芭蕉と龍の目が合い、両者に驚きの表情が浮かび、こう言った。

「そなたは！」

「そなたは。」
「エメラルドの細道・とりかえばやものがたり異聞」

台本 全4幕

丸山 稔子

作曲

押山 晶子

イラスト

森のくじら

《登場人物》

語り部

女性（ ）

夜叉

17

(ソプラノ)

松尾芭蕉

45

(バリトン・メゾ・ソプラノ)

曾良

39

男性（ ）

龍神

20代

(テノール)

九頭龍大神

(バス・バリトン)

大神の慈悲面

女性（ ）

大神の大笑顔

男性（ ）

大神の上向き牙の面

男性（ ）

くノ一①

女性（ ）

くノ一②

女性（ ）

茶屋の娘

女性（ ）

安八太夫安次

《オペラ絵本室内楽団》

ヴァイオリン

コントラバス

フルート

ピアノ

《制作》

特定非営利活動法人 ぶんかのタネ

《場面構成》

一幕一場	弘仁八年（八一七年）美濃の国	P 6
一幕二場	水の中に広がる竜宮城	P 1 0
一幕三場	元禄二年（一六八九年）越中	P 1 1
一幕四場	再び、（八一七年）美濃の国	P 1 3
二幕一場	元禄二年（一六八九年）越中は市振	P 1 4
二幕二場	またまた、（八一七年の秋）美濃の国	P 1 6
二幕三場	大和の国	P 1 8
三幕一場	元禄二年（一六八九年）越中は市振	P 2 1
三幕二場	そして、（八一七年の秋）美濃の国	P 2 4
三幕三場	元禄二年（一六八九年）越後は親知らず子知らずの海岸	P 2 8
三幕四場	いみじくも、（八一七年の秋）美濃の国	P 3 0
四幕一場	いよいよ、元禄二年、福井は今庄	P 3 3
四幕二場	街道の茶屋	P 3 5

《音楽構成》

M 1	序曲	「そなたは。」テーマソング	P 6
M 2	アリア	「十七の夜」（夜叉）	P 6
M 3	二重唱	「これが恋なのか」（夜叉&龍神）	P 8
M 4	アリア	「秋のはまぐり」（夜叉の姿の芭蕉）	P 1 3
M 5	アリア	「平安風雅」（夜叉の姿の芭蕉）	P 1 7
M 6	BGM		P 1 9
M 7	アリア	「恋しさゆえに」（龍神）	P 2 0
M 8	BGM		P 2 5
M 9	アリア	「龍神よ」（大神）	P 2 8
M 1 0	二重唱	「旅立ち」（夜叉&龍神）	P 3 1
M 1 1	BGM		P 3 6
M @	送り出しBGM	「そなたは。」テーマソング	P 3 7

一幕一場

〈字幕〉弘仁八年（八一七年）美濃の国、揖斐川上流の坂内村

○山の頂きにある深いエメラルド色の美越ヶ池の畔

M 1 〈序曲「そなたは。」テーマソング〉

N 夕日がつるべ落としのように隠れ、木々は黒いシルエットとなり、池を囲む。その畔ほとりの大岩には縄が締められ、紙垂しでが風に揺れている。岩の上に白無垢の花嫁衣裳を着た夜叉（17）がうずくまっている。

M 2 〈十七の夜〉

夜叉

私は夜叉、安八あんぱちだゆう大夫の娘

私は夜叉、ゆたかな美濃の里で

私は夜叉、蝶よ花よと育った

十七じゅうななの身空で

龍神に嫁ぐさだめ

恋も知らぬままに

龍にこの身をささげる

恵みの雨のために

民のしあわせのために

とうさま、かあさま

私を忘れないで

どうか、ねえさま

私の織った着物で

いつか花嫁になって

夜空にきらめく天の川

せめて、ああ、織姫になりたい

せめて、ああ、年に一度

愛しい誰かに会いたい

私は夜叉、じゅうなな十七の今宵

私は夜叉、二度と帰れない旅へ・・・

夜叉「(ため息)若い身空で竜神の嫁なんて。恋もしたことないのに。

鱗だらけの体になるなんてイヤだッ。 あーあ、かっこつけんじゃなかった！ 村に恵みの雨が降るなら、喜んでこの身を捧げマス、なんてサ。龍神が化けた姿がイイ男過ぎて、騙されたッ！ ホントは姉さまが嫁になるはずだったのに！」

※ 夜叉が、忌々しそうに岩の上で地団太じだんたを踏み、涙目で空を見上げると、満天の星が煌いている。天の川の右上にひと際明るい星が目映る。

夜叉「・・・とうとう龍神にこの身を捧げるのか・・・」

〈十七の夜〉ここまで

N 夜叉がわが身を嘆いていると、空がにわかにかき曇り、雷鳴がとどろく。と、静かだった池が波立ち、水柱が吹きあがり、全身が鱗に覆われた龍神が現れる。

N 龍神は、長い首を花嫁姿の夜叉に近づける。

夜叉がわなわなと震え、目から大粒の涙を流して立っているのを見た龍神は、静かにこう言った。

龍神「夜叉よ、逃げ出しもせず、よく一人でここへ来た。親姉妹おやきょうだいとの

別れはさぞ辛かったであろう・・・しかし、案ずるでない。お前をせ
いっばい大切にいたす・・・」

夜叉M「え？・・・この人というかこのリュウというか、全然コワくな
いじゃない。目が、優しい・・・」

M3 〈これが恋なのか〉

龍神 遠い昔 夜叉と出会った

乾いた大地を這うわが姿

人はみな 忌み嫌う この姿

小突かれ蹴られ、逃げる私を

幼いそなたは 守ってくれた

夜叉 あなたは、あの時のヘビ？

恐ろしく いまわしい姿

でもなぜなの 怖くはないわ

優しい瞳で 私を見つめる

池にひそむ魔物、それとも神？

龍神 私を神の使いと 小さな手を広げ

守ったそなたを 忘れられずに

わが想いは 水より深く

わが想いは 山の頂きを越え

いのちの雨を そなたの里へ

夜叉 わたしのために 恵みの雨を

わたしのために 里を救った

けだもののような 異形の神

わたしを見つめる その瞳に

なぜなの こんなに胸が痛い

龍神 そなたの気高さに 心奪われた

夜叉 あなたの一途さに 揺さぶられた

龍神 ああ、そなただけを ずっと見ていた

夜叉 あなたは彦星のように ずっと見守っていた

龍神 そなたは星のかなたの 織姫のようだ

二人 あなたに会うために 私は生きてきた

〈これが恋なのか〉ここまで

N 龍神と夜叉が初めて相対し、言葉を交わしたその時、突風が吹き、雲が星空を覆った。

と、雨が降り出し、水面を打ち付けた。

龍神 「何だ、この風は、何処から吹いている？・・・」

N 雷鳴がとどろき、稲光いなびかりがあたりを真っ白に照らす。

夜叉 「きヤッ！ カミナリこわいッ」

N 龍神はサッと、夜叉を自分の体で包もうとする。

突風は渦を巻き、竜巻となって水面を走り、夜叉の小さな体は、宙に巻き上げられた！

龍神 「夜叉姫ッ」

N 渦巻く風の中から、ポーンと旅姿の芭蕉翁ばしやうおきな（45）が現れ、夜叉とともに、風に翻弄され、竜巻の中を舞う。

空を縦に裂くかのような閃光せんこうが走り、ガラガラドッシャーンという凄まじい轟音ごうおんとともに、稲妻が湖を波立たせ、落ちた。

夜叉 「きやあああ」

芭蕉 「わああああ」

N その瞬間、夜叉と翁の体がぶつかり、二人は気を失う。

N 雷を受け、気を失っていた龍神が目覚まし、辺りを見回すと、竜巻は、まるで糸で引き上げられているかのように、空へ昇っていく。

龍神は、岩の上に倒れている夜叉に鼻面を近づけ、目を細める。

龍神 「夜叉、愛い奴よ・・・」

N そして、うめき声をあげて倒れている芭蕉の方にギョロリと目を向けると、尾を高く降り上げて、バッテリーよろしく、芭蕉の体をバーンツと打ち上げた。

芭蕉の体は、再び黒い渦の中へ飛んでいく。

一幕二場

○水の中に広がる竜宮城

N 水草の寝台の上で目を覚ます夜叉。起き上がり、あくびをすると、周りを見回す。

寝殿造りの立派な館だが、天井が無く、頭の上を水が流れている。

夜叉の姿の芭蕉 「ここは？・・・何だこの声は・・・わ、私は、なんで、おなごの着物を着ている？」

N 夜叉は、ふと胸元のふくらみに手を当てる。

夜叉の姿の芭蕉 「ひっ！こ、この体は！・・・」

N 夜叉はうめき声をあげ、倒れる。

夜叉の体には、松尾芭蕉の魂が宿っており、己が、娘の姿かたちになったシヨックで、気絶したのだった。

〈暗転〉

一幕三場

〈字幕〉 元禄二年（一六八九年）越中

○波の静かな越中の海岸

N 芭蕉とともに「奥の細道」俳句紀行の旅をする弟子の曾良が、ひとりトボトボと浜辺を歩いている。

曾良 「荒海あらくみや 佐渡さどによこたふ 天河あまのがわ・秀逸な句だわ・・さすが芭蕉さまん・・ああ、ご無事かしら・・竜巻に飛ばされて、何処へ・・ん？」

N と、前方に波に洗われて横たわる人の姿があり、曾良が近づくと、まぎれもない芭蕉であった。曾良は、芭蕉の体を抱き起こす。

曾良 「ば、芭蕉さまあ！ しっかりしてください！」

芭蕉の姿の夜叉 「う・・ううん」

曾良 「よかった、死んだかと思ったア」

芭蕉の姿の夜叉 「ちよつとオ、何すんのよ！」

N 目を覚ました芭蕉の姿の夜叉は、羽交い締めになれながら、足で曾良の股間を蹴る。

曾良 「アアッ！ 何をなさるの！ イタタ・・・」

N 曾良は股間を抑えて砂にうずくまる。目覚めた芭蕉に宿るのは、平安の世で、村を日照りから救った龍神の花嫁となるはずだった夜叉の魂だった。芭蕉の姿となった夜叉は、砂の上に身を起こすと、見慣れぬ景色を見まわす。

芭蕉の姿の夜叉「こ、ここは？ 龍神、アタシを何処に連れてきたの？」

曾良「龍神？ 師匠様、曾良ですよ、あなたの弟子の！ ここは越

中の市振いちぶりじゃないですか・・岩に頭でもぶつけたのかしら・・」

芭蕉の姿の夜叉「越中？ あら、なんて広い池・・ここは坂内じゃないわね・・」

曾良「池？・・海を池に例えるには無理がありますよ、いくら芭蕉様でも。坂内とはいずれこの？ 芭蕉様、旅の予定を変えるのでしたら、この曾良にお申し付けを・・」

芭蕉の姿の夜叉「ソラ、空って、お天道てんどうさまのいる、あの空？・・あなたは龍神じゃないの？」

曾良「龍神？ また訳の分からないことを言って、私をかついでいるのですねッ。芭蕉様、長旅もいよいよ終盤、美濃の国も近うございませよ！」

芭蕉の姿の夜叉「美濃の国？ あなたは龍神じゃないとすると、もしかして、神様か仏様？ 訳わかんないけど、夜叉は助かったのね！」

N 芭蕉の姿の夜叉は喜びの涙を流し、飛び跳ねる。

芭蕉の姿の夜叉「ヤッタ！ アタシの心がけがいいからだわッ。さっ、早く美濃へ帰りましょッ！ ふふふ」

曾良「そんなに跳ねると、御着物がハダケます、一体どうされたのかしら」

N ぴよんぴよん跳ねるうちに、芭蕉の着物は裾からはだけ、すね毛が生えた脚が露あらわになる。

芭蕉の体に宿る夜叉が下を向くと、着物の合わせがはだけ、ふんどしが丸見えになっている。

芭蕉の姿の夜叉「ぎゃあ！ アタシに何したの、変態！」

曾良「ああ、やはり岩に頭をぶつけられたのね・・・ささ、宿で休みましよう・・・休めば元通りに・・・」

芭蕉の姿の夜叉「や、休めば元通りになるよね・・・これは悪い夢よね」

一幕四場

〈字幕〉 再び、八一七年。 美濃の国、坂内村の美越ヶ池

N 赤く燃える紅葉もみぢに囲まれた水面に龍神が浮かんでいる。

龍神は体の上に、夜叉にしか見えない芭蕉を乗せている

M4 〈秋のはまぐり〉

夜叉の姿の芭蕉

俳諧の道に すべてを架け

ただひたすら 歩みつづけた

「不易ふえきを知らざれば 基立もとたちがたく」

「流行りゅうこうを知らざれば 風新かぜあらたならず」

命わずか五十年 寸時を惜しみ、

まだ見ぬ歌枕へ はやる思いは

募り募って 時空を超えた

それが私に 許されるなど

思い上がった 所業ゆえか

縁無き おなごのからだに

この魂を 囚われようとは

おごれるこの身に 天罰が下り

むすびの地へは たどり着けぬ

神よ ああホトケよ せめて 一目だけでも曾良に

神よ ああホトケよ せめて 最後に焼きハマグリを

その手は桑名の 焼きハマグリを

夜又の姿の芭蕉「時を自在に行き来するなど、神をも恐れぬ所業にバチが当たったか・平安の女子おなじとなり、化け物、いや失敬、龍神の嫁となろうとは・・・もう曾良には会えぬのか・・・秋か・・・今頃は太垣で友と語らい、伊勢へ向かおうとしているはず。そう、桑名に寄って、あの、乙な焼き蛤を！」

N 龍神は愛おしそうに、夜又の顔に鼻面を近づけ、舌でぺろりと舐めると、夜又の体に宿る芭蕉は、ブルブル身震いをする。

夜又の姿の芭蕉「ああ・・はまぐりのふたみにわかれゆく秋そ・・」

龍神「ン？」

〈秋のはまぐり〉ここまで

二幕一場

〈字幕〉 元禄二年（一六八九年）越中は市振

N 宿の部屋で枕を並べ、芭蕉の姿の夜又と、曾良が休んでいる。

隣の部屋から、若い女の甲高い笑い声や年配の男の低い声が聴こえる。

曾良「遊女と一つ屋根に寝ることになろうとは・・伊勢参りに行くとか申していたが、あの女たち、湯上りに、芭蕉様に色目を使ったり

して、いやらしいったら！」

N 曾良は、自分の布団を芭蕉の布団を引き寄せ、目を閉じる。

N 夜が更け、月の光もない暗闇の中で、ミシッと、床を踏む音がし、曾良は薄く目を開ける。

曾良M 「人の気配？・・・」

N と、暗闇で刃が光り、宙を切るひゅっという音がすると同時に、曾良は布団をかぶったまま飛び上がると、すばやく芭蕉の姿の夜叉の体を布団でくるみ、部屋の隅に追いやる。

くノ一①の声 「うぬ、気づかれたか」

N 全身黒づくめの女が、刃を曾良めがけて振り下ろすが、曾良は懐から短刀をサツと出し、女の刃を止める。

曾良 「何やつ！」

くノ一① 「お前は只者ではないな、伊賀者か？ だがお前に用はない。芭蕉翁をいただくまでだッ。邪魔建てるでないッ」

N 女の影が二つになり、曾良に刃を向ける。もう一人の女が、布団に俵虫になった芭蕉を見て、言う。

くノ一② 「ねえさん、様子が変よ・・・これは偽せ者だ！ 芭蕉なら、とうに刃向かってくるはず！」

N 芭蕉の姿の夜叉が大いびきをかいている。

くノ一① 「わ、畏かつ　ここは引き上げようぞ！」
くノ一② 「はいッ」

N 二人の女の影が、煙幕とともに消える。

曾良 「甲賀のくノ一か、あやつら・・それにしても、芭蕉様！　見事な戦術。無用な殺生を避けるために、寝たふりをされるとは！」

N 芭蕉の姿の夜又は、大きないびきを立てている。

〈暗転〉

二幕二場

〈字幕〉　またまた、八一七年の秋　美濃の国、坂内村の美越ヶ池

N 湖面が揺れ、龍神が水しぶきをあげて、飛び出し、夜の空へ昇っていく。その背に夜又の姿の芭蕉がしがみついている。

夜又の姿の芭蕉 「龍神よ、私が夜又でないと信じてくれたのか・・」
龍神 「紅やかんざしに見向きもせず、好きな機織りもしないのだから別人としか思えぬ。暇があれば俳句なるものをしたためるばかり。貴殿が夜又であるわけがない。芭蕉、と言ったな。貴殿が命を懸けてでも、見たいという歌枕とやらに出かけようぞ」
夜又の姿の芭蕉 「おお、それは有難い。夜又でないとわかった以上、生かしてもらおうとは思わぬ。西行法師や人麻呂が訪ねた地を、ひと目でも拝めれば、何も悔いはない」

N 龍神は身をくねらせて泳ぐように空へ昇り、やがて彗星のごとく、西へ、西へと空を渡る。

N

夜叉の姿の芭蕉は、眼下に、碁盤の目のような平安の都を見る。
義経と静御前が出会った京の神泉苑しんせんえんには、池に朱塗りの橋がかかり、華やかな衣を着た下膨れの女たちや、冠に袴姿の貴族たちが舟遊びをし、宴うたげを繰り広げている。
龍神は、絢爛豪華な二条城の御殿、朱雀門すざくもんの間を縫うように飛び、芭蕉に平安絵巻を見せていく。

M5 〈平安風雅〉

夜叉の姿の芭蕉

笛を奏で、鼓みを叩き、
平安人のみやびなことよ
女たちは 艶やかな髪、
御簾の向こうで 恥じらいの瞳
男たちは 粹すいな口上を
袂たもと振るたび 香を匂わせ
会い介さずとも 文を交わし
和歌を詠んで 思いを託す
無下むげにするは 興きょうざめなり
文を扇に載せ 身を引くもたしなみ
花を愛で 月を愛で 趣を尊ぶ
平安人のみやびなことよ

夜叉の姿の芭蕉 「平安の都は、なんと風雅な。身分ある者は雅楽を楽しみ、歌う。俳諧もたしなみの一つだったのか・・女人にょにんと御簾みすごしに話し、文を交わす。顔を合わせずとも、相手の人となりもわかるのだらう・・文ならば、恋が成就せずとも、面と向かって興きょうざめな話をせずに済む。ブ男ぶおとこであっても文ふみの心づかいで、相手の心を掴めるやもしれん。江戸の世の色恋沙汰より、ずっと粹だ・・」

二幕三場

〈字幕〉 大和の国、畝傍山から飛鳥の里をのぞむ

N 夜叉の姿をした芭蕉は、龍神の背に乗って大空を飛び、飛鳥の里にそびえる畝傍山うねびやまに降り立った。

龍神はポンツという音と共に、りりしい若侍の姿となり、芭蕉と共に、持統天皇の世に着工したという藤原京跡を眺めた。

平城京遷都の前、短命の都だった地は、京の都と同じく碁盤の目のごとく整然とした町で、周囲を瓦葺きの塀が巡っている。身分の高い官吏が馬で闊歩し、門の置かれた辺りに、賑やかな市いちが営まれていた。

夜叉の姿の芭蕉 「この地で柿本人麻呂は宮仕えをし、かの名句を詠んだのか」

龍神 「貴殿が、しきりに褒めたたえるその万葉歌人はどんな歌を詠んだのだ？」

夜叉の姿の芭蕉 「(朗々と、)『夏草の 思ひ萎しなえて 偲しぬふらむ 妹いもが 門見かどむ 靡なびけこの山』」

龍神 「なびけ、この山・・・なんと激しい。人麻呂は、よほど誰かに思い焦がれていたのだな」

夜叉の姿の芭蕉 「人麻呂は宮仕えの身ゆえ、はるか石見いわみの地に残してきた妻がいとおしく、この歌を詠んだそうだ」

龍神 「妻をいとおしんで・・・まさに我が心と同じだ・・・なびけ、この山、彼方に夜叉の姿が見えるように・・・」

N 龍神の瞳から一筋の涙がこぼれ、芭蕉は、ハッとす。

夜又の姿の芭蕉「あなたは、夜又を雨を降らせた見返りにもらっただけではなかったのか」

龍神「我が一族は、美濃の国の一番高き所の池に、国の始まりより住み、天変地異からこの国を守ってきたのだ。あるとき、里に降りて、安八村の長者の娘らに出会った・・・」

M 6 〈BGM〉挿入イメージ（龍神の回想）

N 大地がひび割れ、雑草も枯れた野原を、華やかな色の着物を着た二人の幼い娘達が、駆け回り遊んでいる。

草むらから這い出たへビを見つけた姉娘が、枯れ木の枝を拾うと、へビを小突きながら、追い回していた。

妹の夜又が見かねて姉に駆け寄り、その手から木の枝を挽ぎ取る。

夜又「あねさま！ 生き物をいじめてはいけませんっ」

姉娘「へビなんかきらいなもの。へビなんていない方がいい！」

夜又「あねさま！ おとつつあんがへビは神様の使いだって言っていたわ。だからいじめてはいけません！」

姉娘「わ、わかったわ・・・（息をのむ）」

N そこへ、夜又たちの父親で、里を治める長者の安八太夫安次あんばちだゆうやすつぐが通りかかった。

安八太夫安次「夜又の言うとおりで。へビをいじめてはならん」

夜又「あ！ おとつつあん！」

安八太夫安次「のう、へビよ、百日も雨が降らんで、村の者もんは困り果てておる。水の神の使いなら雨を降らせてはくれぬか？ そうしたら、お前の望みは、何なりとかなえようぞ」

N　へビは、一度、夜叉の方に顔を向けると、身をくねらせて草むら
の中へ消えていった・・
(回想終わり)

夜叉の姿の芭蕉「そのへビというのは、あなただったのですね？」

〈BGM〉ここまで

M7 〈恋しさゆえに〉

龍神　これは私への天罰か

愛しい夜叉は今いずこ・・・

民を思い　村を案じ

恵みの雨を　真摯に願ひ

雨乞いした大夫に　私は

娘を妻に差し出せと

私はとうに　わかつていた

けがれを知らぬ　夜叉姫は

約束を守るは　人の道なりと

私のもとへ　嫁いでくると

何と浅ましい　駆け引きか

大神の使いとも　あろう私が

愛する者のさだめを　狂わせた

夜叉の魂は　遠い時の彼方へ

夜叉は一人で　やってきた

凜と気高い　あの姿

天よ　夜叉を里へ　返したもう

私の妻になどと　もう言わぬ

この身を裂かれても　構わない

里の織姫を　返したもう・・・

龍神「いかにも。私は、雨乞いを祈る「安八太夫安次」あんばちだゆうやすつぐに、つい言っ
てしまった。お前の娘を嫁に差し出すのなら、雨を降らせよう、と。
夜叉は、健気にも、民百姓のために、私の嫁になると承知した。あ
あ、大神の使いともあろう者が、浅ましい取引をしたばかりに、そ
なたらの魂が入れ替わってしまったのだ！」

〈恋しさゆえに〉ここまで

三幕一場

〈字幕〉 元禄二年（一六八九年）越中は市振

○宿の部屋

N 越中市振の宿の部屋で、筆と紙を前に、芭蕉の姿の夜叉が頭を抱
えている。

芭蕉の姿の夜叉「うう・・・アタシに和歌を詠めと？」

曾良「俳句です！ いい加減に一句詠んでください。佐渡の歌以来さ
ぼってるんですから。（以下モノログ）いくらお疲れで旅に嫌気が
さして、女子のふりをしていても、さすがに俳句を冒瀆されまい。

俳聖芭蕉と呼ばれるお方が」

芭蕉の姿の夜叉「五、七、五ね。米うまし、さかなもうまし、宿の飯！」

曾良「（投げやりに）季語がありませんよ」

芭蕉の姿の夜叉「季語ね・・・米うまし、さかなもうまし、秋の風。
はい、カンペキ！」

曾良「（息を呑んで絶句）・・・そ、そなたは一体、誰？」

芭蕉の姿の夜叉「だっからあ、夜叉、って言ってるじゃない！ 美濃
の豪商の二女、夜叉よ！ 日照りつづきで米もとれず、みんな死に

そうになったの。おとつつあんが、龍神に、雨を降らせてもらう約束をしたら、本当に恵みの雨が降ったの。それで、お礼に、私がお嫁入りすることに」

曾良「その話聞いたことあるわ・・・そなたは、正真正銘、伝説の夜叉姫？　つまり、芭蕉様とそなたの魂が入れ替わった？・・・なぜ、なぜ、そんなことが！」

芭蕉の姿の夜叉「なぜって、こっちが聞きたいわよ！　こんな爺さんになっちゃって・・・アタシが龍神の嫁になりたくないって思ったから、バチが当たったの？・・・おとつつあん、おっかさん、ごめんなさい・・・龍神、ごめんなさい！」

N　芭蕉の姿の夜叉はさめざめと泣き、曾良は途方に暮れるのだった。

○村の神社の参道

N　飴屋、唐辛子屋、団子屋などが立ち並ぶ、縁日の参道を、目を丸くした芭蕉の姿の夜叉が、曾良と連れ立って歩く。

まげを結い、赤や紫の華やかな柄の着物を着た若い娘たちが、出店を冷やかしながら歩いている。

芭蕉の姿の夜叉「へえ、あんな髪形見たことない・・・空さん、あの女の人は身分が高いの？」

曾良「あれは島田髷しまだまげといって、江戸で流行っている髪形よ。越中は田舎と思いきや、江戸っ子顔負けに粋ね。驚いたッ」

芭蕉の姿の夜叉「島田髷・・・江戸の世の女子おなごは髪を結うのね。そして、男は、空さんみたいに女子のような話し方をするのね？・・・面白い！」

曾良「女子のよう・・・ま、いいか。ご機嫌がよくなったようだし。女子とは、いつの世も、縁日が好きなのねえ」

N 曾良と芭蕉の姿の夜叉が、旅支度をし、宿をあとにする。

曾良「さて、このまま美濃の国へ向かってよいものか・・・」

芭蕉の姿の夜叉「空さん、聞きたいんだけど、芭蕉さんはなんで、命を狙われたの？ 芭蕉さんは忍びの者なの？」

曾良「え？ あの時は寝ていたんじゃない？」

芭蕉の姿の夜叉「寝たふりしたの。下手に動いても迷惑かけるし」

曾良「夜叉さん、大した度胸ねえ。さすが、龍神に嫁ぐ覚悟をした女子だけあって。芭蕉様は、伊賀の出でいらっしやるといっただけで、甲賀者にお上の隠密だと疑われているの。もっとも、時を飛ぶなどとおっしゃって、神隠しみたいな術を使われるから、そう思われてもしかたないけど・・・（ため息をつく）旅に出る度に刺客が襲ってくるから、私も気が抜けないのです」

芭蕉の姿の夜叉「隠密？ 甲賀者？ 太平の世と言いながら、江戸の世も大変じゃん。アタシのお里も民が年貢に苦しんでるけどね」

曾良「ねえ、夜叉さん、美濃をめざす前に、そなたと芭蕉様の魂が入れ替わった場所へ戻ってみましようか」

芭蕉の姿の夜叉「賛成！ 江戸の世の美濃の国へ辿り着いたところで、おとつあんもおつかさんも、もういないんだし・・・」

曾良「そうね。よし、一か八か、振り出しに戻るつもりで、行ってみましよう」

芭蕉の姿の夜叉「うんッ 空さんも、だあい好きな芭蕉さんに会いたいのね！」

曾良「な、何を、急に」

芭蕉の姿の夜叉「あ、空さん、赤くなった！」

N 芭蕉翁の姿の夜叉が、曾良の周りをはねながら、からかうようにその顔を覗き込む。曾良は、慄然として、早足で歩きます。

三幕二場

〈字幕〉そして、八一七年の秋 美濃の国、上空

N 龍神の背にまたがった夜又の姿の芭蕉が、近江と美濃の境に横たわる峠の空を、坂内の村へ向かって飛んでいく。

夜又の姿の芭蕉 「龍神よ、いにしえの歌枕をたどり、私にはもう思い残すことはない・・・」

龍神 「いや、芭蕉どの。貴殿を、元禄の世へ連れ戻し、夜又をこの平安の御世に引き戻そうぞ・・・私の持てる力のすべてを懸けて」

夜又の姿の芭蕉 「あなたにそんな力が・・・」

龍神 「それは私にもわからぬが、大神に助けを求めようと思う」

夜又の姿の芭蕉 「大神？」

龍神 「九頭竜大神様だ。自然の理ことわりに逆らったそなたを本来の定めへと導く術すべをあの方ならご存じだろう」

夜又の姿の芭蕉 「九頭龍・・・一つの尾に九つの頭を持つ、あの伝説の・・・」

龍神 「恐ろしい姿をされているが、朝に三千、夕べに八百の唐鬼からおにを食べ、民を疫病から守り、仏法の守護神として君臨する方だ」

夜又の姿の芭蕉 「大神は何処にゆけば会えるのですか？ 私もお供します。私がすべての元凶なのですから」

N にわかには、空を黒い雲が覆い、雨が降り出した。

龍神 「大神はまさに神出鬼没だ。もうおいでになった」

夜又の姿の芭蕉 「エッ？・・・」

N 龍神が、美越ヶ池の畔に舞い降りると、池の真ん中から、水柱が

勢いよく立ち上げる。

天へ登るその水の中から、九つの龍の首が現れ、上になり下になりくねりながら、龍神と夜叉の方に向かってくる。

夜叉の姿の芭蕉「ギョエー！ー！ー！」

M 8 〈BGM〉

大神「ワシを呼んだのはお前か」

N 地の底から響くような声でそう言ったのは、大神の正面の顔だ。眉を吊り上げ、目の奥に怒りをたたえた険しい顔つきである。ほかの八つの頭も、それぞれ長い首の上に乗ってゆらゆら動きながら、龍神たちから目を離さない。

九頭龍大神の正面の顔の後ろから、首のひとつがぬうつと出て、芭蕉のにおいを嗅ぐように鼻を動かす。

眉が下がり、女性的なその顔は「慈悲面」だ。

夜叉の姿の芭蕉「ひっ」

慈悲面（女顔）「おーや、おなごのなりをしているが、男だねえ……お前が遙か先の世からやってきた輩やから？」

夜叉の姿の芭蕉「は、はい、バ、芭蕉と申します」

N その横から、大口を開けて牙を剥きだして不気味な笑みをたたえた「大笑正面」が、さらに芭蕉に近づき、言う。

大笑面「フン、神をも恐れぬふとどき者！ 何しにここへ来た！」

夜叉の姿の芭蕉「お、恐れながら、平安の世を目指したわけでは……、いわば、手違いです。歌枕を訪ねて旅をしておりましたところ、行程が遅れてしまい、ほ、ほんの半日でも先に進めればと……」

N 慈悲面と大笑面の後ろから、結んだ口の間から上向きの牙が付き
でた無表情の首がぬうつと前へ出てきた。

上向きの牙の面「どうやって、時を超えた？」

夜又の姿の芭蕉「わ、私にもよくわからんです。ただ、先人たちの
詠んだ歌枕を多く訪ねたくとも、それがかなわぬとき、いつそ時を
越えたいと願うと、時空の穴が現れるようになって・・・」

大笑面「はっはっはッ・ぬしは選ばれし者とも言うのか」

夜又の姿の芭蕉「選ばれし？・滅相もない、私はただ、良き句を詠
むことだけを考え・・・」

大笑面「良い句を詠めば何をしても許されると思っているな？ 奢つ
た奴め！ 聖人面して反吐が出るワ、いっそその首食いちぎってや
ろうか」

夜又の姿の芭蕉「ひっ！」

慈悲面「そんなに脅かすのはおよし。邪気のない、呑気な男のようだ
から、仕置きは無用でないかい？」

上向きの牙の面「時の流れには掟がある。悪気はないではすまされん。
しばらく逆さづりにしてやろう・・・」

夜又の姿の芭蕉「ひえええ」

N 大神の真ん中の首は、口を真一文字に結んで目を閉じているが、
ほかの八つの首たちは、芭蕉の沙汰をああだ、こうだと、喧々囂々
と話している。

首たちが上になり下になり、くねくねと絡み合う様を見て、芭蕉
は震えあがっている。

龍神は沙汰を待つように、腕を組み、静かに目を閉じている。

やがて、大神の正面の首は目を開くと、のたうち回り絡み合っ
いた八つの首たちは、体の両脇にすつと戻り、おとなしくなる。

大神の正面の憤怒に満ちた顔が、口を開いた。

大神正面の顔 「(大声で) かあああつ!!!」

夜又の姿の芭蕉 「ひええ！」

N 大神は、芭蕉と龍神の周りを、とぐろを巻くように回り始めた。

大神正面の顔 「覚悟はよいか？」

夜又の姿の芭蕉 「私はどんな罰でも受けますから、私のせいで、時の彼方へ飛んで行った夜又を、お助けください・・・」

N 大神は旋風を起こし、二人の体を宙に巻き上げる。

夜又の姿の芭蕉 「うわあああ!!」

龍神 「芭蕉どの、案ずるでない。そなたの来し方を、時空を超えたときにそなたがいた場所を思い浮かべるのだ！」

夜又の姿の芭蕉 「わが来し方を?・・・」

N 龍神は元の龍の姿に戻り、芭蕉を竜巻から守るように、その長い体を幾重にも芭蕉に巻き付ける。

大神の回転は激しさを増し、その姿は、疾風そのものとなり、二人の体を引き裂かんばかりに翻弄する。

夜又の姿の芭蕉 「曾良あああ!!」

〈BGM〉ここまで

N 風に舞う木の葉のように、宙に漂う夜又の体と龍神。

闇の中に、九頭龍大神の声が響く。

M9 〈龍神よ〉

大神 我は異形の神 八つの心眼と力で

鬼をも制し 朝飯に食らう

坂内の池に棲む 若き龍神よ

芭蕉を連れていけ 江戸の時代へ

時に穴を開けようぞ 全身全霊で

いつの世にも必ず 選ばれし者がある

人におもねず 道を切り開く者が

芭蕉は 選ばれし ことのはの才人

後の世に生きる者へ 叡智を伝える賢者

何人も見たことのない道をゆく

龍神よ 芭蕉の魂を 在るべきところへ戻せ

人は弱き者 あやまちは生きる証し

この嵐を槍に変えて 時に穴を開けよ

龍神よ そして 恋女房を取り戻すがいい

〈龍神よ〉ここまで

三幕三場

〈字幕〉 元禄二年（一六八九年）越後は親知らず子知らずの海岸

N 荒波が岩に打ち付けては、白く砕け散る。芭蕉の姿の夜叉と曾良が、岩場を恐る恐る越えて、進んでいく。

芭蕉の姿の夜叉 「ううこわい。俳句を極める旅って大変なのね・・・足を踏み外したら波にさらわれしまう！ 芭蕉さんが忍びの者って疑われてもしょうがないわね・・・普通のじいさんじゃないわ・・・」

曾良「じいさんとは無礼な！ 芭蕉様はお若い！ 八百比丘尼やおびくにのよう
に不老のお方なのよッ」

芭蕉の姿の夜叉「ハイハイ、ごめんなさい。で、ここで間違いないの？
芭蕉さんが竜巻の中に吸い込まれていったのは」

曾良「間違いない。すっかり秋も深まったけれど、この岩場あたりで、
足を滑らせて、あの方の手を離してしまった……」

N どんよりした空の下、冷たい潮風を正面で受け、二人は、空の彼
方を見つめる。

まだ地平線にほのかな日の名残り残る夕暮れの空に、キラリ、と
ひとつ、光を放つ星がある。

芭蕉の姿の夜叉「ほら、あの星！」

芭蕉の姿の夜叉・曾良「織姫星だ！」

曾良「美しい……」

芭蕉の姿の夜叉「江戸の世でもそう呼ばれているのね。アタシ、龍神
の元からここへ飛んで来たときに、織姫星を見たの」

曾良「では、あの時、私たちは同じ星を見ていたのね……」

N 二人は、静かな波のきらめきを見ながら、ただやるせない思いで
時をやり過ごした。

夕闇がとつぷりとあたりを包んだころ、空に星がまたたき始め、
二人が見つめる織姫星は、ひと際輝きを増した。

やがて、その星の奥から、渦巻く風雲が現れると、一天にわかにか
き曇る。

曾良「竜巻？……あ、あの時と同じ！ もしかしたら、あの中に芭
蕉様が……芭蕉様あああ！」

芭蕉の姿の夜叉「じゃあ、龍神もやって来るのね！ りゅううじーん！

アタシはここよおおお」

N 夜叉と曾良は空から降りてくる竜巻に向かって、声を枯らさんばかりに叫んだ。

竜巻は浜辺の二人の方に近づき、なんと、渦の中から、龍神の背に乗って、擦り切れた白無垢の衣装をまとった夜叉の形をした芭蕉が飛び出してきた。

曾良「あつ、あれは！」

芭蕉の姿の夜叉「龍神！」

N 龍神と、芭蕉の姿の夜叉の目が合い、夜叉は、大きく手を伸ばす。

白無垢姿の芭蕉は、龍神の背から飛び降り、と同時に、芭蕉の姿の夜叉は、岩の上から、押し寄せる波と竜巻の方へ、思い切り飛び上がった。

龍神「夜叉姫！」

N 空に稲妻が轟き、目のくらむような眩い閃光が辺りを照らす。

曾良は、あまりの眩しさに、両腕で目を覆った。

天空からまっすぐに火柱が立ち、曾良が立っていた岩が砕けた！

そして、漆黒の闇があたりを包み、すべての音が消えた。

〈暗転〉

三幕四場

〈字幕〉 いみじくも、八一七年の秋 美濃の国、坂内村の美越ヶ池

○池の畔

N 若侍のいで立ちの龍神と、白無垢をまとった夜叉が、色づいた山中の美越ヶ池に突き出した岩の上で、気を失って倒れている。輪を描いて飛んでいたトンビが夜叉の横をかすめ、夜叉が目覚めます。

夜叉は体を起こし、辺りを見回す。そこは、まぎれもなく坂内村の池で、龍神のもとに腰入れする覚悟で上がった岩の上だった。

M10 〈旅立ち〉

夜叉 爺さんの体じゃない・・・
元に戻ったんだわっ・・・
そ、それともアタシ、
夢でも見ていたの？・・・
あ・・・龍神？

※龍神が倒れているのを見つけ、夜叉が駆け寄る。

着物はズタズタに裂け、体中から血を流している。

夜叉 龍神！

しっかりして！

※夜叉がその体を揺さぶると、龍神が目を開ける。

龍神 夜叉姫・・・

無事か・・・

夜叉 龍神！

アタシを連れて

帰ってきてくれたのね！

ありがとう、

もう会えないかと思った・・・

すまない、

私がお前を嫁に

望んだばかりに、

こんなことに・・・

夜叉

ううん、村を救ってくれたあなたに
嫁ぐって決めたのに、
逃げ出したくなって。

だからバチが当たったのね・・・
ごめんなさい！

ああ、ひどい怪我！

手当しなくちゃ

龍神

夜叉、（呻きながら）

私をこのまま湖に沈めてくれ、

そして、

そなたは村へ

帰れ・・・

夜叉

何を言うの！

アタシ、江戸の世に行って、

わかったの！

人には定めというものがあるって。

龍神の妻になって、

一緒に美濃の国を守るのが

アタシの定めなんだって！

龍神

夜叉・・・

夜叉

だから、

私も一緒に湖に帰る

※ 龍神の目から一筋の涙がこぼれた。

龍神

夜叉、聞いてくれ。

私はそなたと出会い、

そなたを守るのが、

自分の定めと知った。

そなたを無事連れて帰り、

思い残すことはない。

・・・どうか、

私の分も生きてくれ。

そして、

しあわせに・・・

※ 龍神は、必死で身を起こし、片膝をつき、肩で息をすると、夜叉を引き寄せる。

夜叉 龍神・・・

※ 龍神は力強く夜叉を抱きしめるが、やがて腕がだらりと下がり、夜叉の方に寄りかかったまま、力尽きたように、動かなくなる。

夜叉 え？ ウソ！

ウソでしょ、

やっと会えたのに！

ねえ、目を開けて！

お願い、私を置いてかないでッ

※ 夜叉は龍神の体を揺さぶるが、龍神は目を閉じ、微動だにしない。

夜叉 龍神！！！！

〈旅立ち〉ここまで

〈暗転〉

四幕一場

○白根が岳の山並み（全景）

〈字幕〉 いよいよ、元禄二年、福井は今庄

○宿の部屋

N 曾良が布団に横たわっており、傍らで、芭蕉が旅支度をしている。

曾良「申し訳ございません。こんなときに腹を患うとは・・・」

芭蕉「旅で疲れておるときに食べ付けぬものを口にしたのでろう。曾良、案ずるな、伊勢長島の縁者に、そろそろ飛脚が書状を届けたころだろう。養生してから向かうとよい」

曾良「せっかく、師匠様と無事再会がなかったというのに、道を分かつとは残念無念・・・あなたとサイゴまでイキたかった！ あ、いえ、むすびの地までお供したかった・・・」

芭蕉「曾良、それは、私も同じ思いだ・・・福井までたどり着けたのもひとえにそなたのおかげだ。礼を言う」

曾良「いえ、そんな。くノ一に襲われながら、無事に此処まで来られたのは、芭蕉様の機転のおかげです。あの時は本当に・・・」

N 芭蕉は思案顔になり、口を開く。

芭蕉「その、遊女を装ったくノ一が、襲ってきた話だが・・・」

曾良「ハイッ 芭蕉様が狸寝入りをしたおかげで事なきを得ました」

芭蕉「私は何も覚えていないのだ」

曾良「はい?・・・」

芭蕉「遊女を装ったくノ一と、同じ宿であったことも・・・」

曾良「え? だって、見事な句を詠まれたではないですか、『一家ひとつやに遊女も寝たり 萩と月』・・・」

芭蕉「そなたの話聞き、出来事を思い浮かべ、詠んだまで。そのよ
うなことは全く覚えていない」

曾良「師匠様、本当に寝入っていらしたのですか・・・」

芭蕉「(フツと笑い) 越後からこの北陸路まで、すべてが夢うつつだ。
しかし・・・」

曾良「しかし?」

芭蕉「不思議な夢を見た。平安歌人の心意気に触れでもしたような・・
夢から覚め、いっそう、俳句の修業に精進せねばならんという心持
ちになっておるのだ」

曾良「平安歌人の心意気・・・くノ一に襲われたにも関わらず、よい
夢をごらんになりましたね・・・ウツ、イタタ」

芭蕉「曾良、無理をするでないぞ。伊勢で会おう」

曾良「はい、芭蕉様、必ず！」

四幕二場

○街道の茶屋

N 芭蕉が茶屋の前の腰掛で休んでいる。娘が茶と団子を持ってくる。
すがすがしい朝の空気の中、前方の山を眺めながら、芭蕉は茶を
すすする。

芭蕉「あの山に見覚えがあるが、気のせいか。人づてに名所の話でも
聞いたのかもしれない」

娘「お客さん、あの山の上には世にも美しい池があるんですよ」

芭蕉「世にも美しい池？」

娘「何でも、太古の昔から、水が一度も枯れたことが無いという」

芭蕉「ほう、見てみたいものだが、山に登るとなると、美濃の国へ着
くのが遅れてしまうな」

娘「あ、山の頂きから、向こう側へ下れば、美濃の国へ抜けますよ」

芭蕉「山の向こう側が美濃の国？ 娘さん、その池は何と呼ばれてお
るのですか」

娘「夜叉が池と、うちらは呼んどります」

芭蕉「夜叉が池・・・」

娘「ええ。なんでも、昔、村を日照りから救って、龍神の嫁になった
夜叉姫が、いまでも池に棲んでいるんだとか」

芭蕉「夜叉姫・・・」

N 茶の代金を置き、思い立ったように機敏に腰を上げると、芭蕉は山の上り口に向かって歩き出した。

○坂内村へ向かう山中

N カナカナカナと、日暮らしの鳴き声が其処ここで聴こえる。木立の間に間に、日差しが射しこんでくる。

汗を拭いながら、山道を黙々と、ただ前を向いて歩く芭蕉。

× × ×

○坂内村・夜叉が池全景・黄昏時

N 鬱蒼と草木の生い茂る道なき道から、湖畔にたどり着いた芭蕉は、かすかな日の名残りの中で、静かな池を見つめる。

芭蕉「この風景、なぜ懐かしいのだ？ これまで、大垣の木因ほくいんたちのもとを二度訪ねたが、この地に入ったことはないはずだ」

N 芭蕉は、畔の大きな岩に上がると、荷を降ろして座った。

そして、何かを思い出そうとするように、目を凝らして周りを見回しては、また首をかしげる。

芭蕉「日が沈む前に行かねば。麓へ降りて、村人に宿を頼むとしよう」

N 芭蕉は腰をあげ、岩から降りかけたとき、岩の上に、櫛おしろい、かんざし、紅、お白粉が、置かれていることに気づく。

芭蕉「これは！・・・」

M 1 1 〈B G M〉

N 芭蕉が不思議そうに供え物を眺めていると、池の水面に泡ぶくが浮かび出した。

やがて池の真ん中から水が噴水のように盛り上がると、ザーッと、水柱が上がった。

芭蕉 「な、なんだ！」

N 芭蕉が身構えると、天に向かって高く立ち上がった水柱の中からくれないいろ紅色の大きな龍が現れた。

芭蕉 「わあああ！」

〈B G M〉ここまで

N 驚いた芭蕉は後ずさりし、岩の上に尻餅をつく。

恐ろし気な顔かたちで、全身が鱗で覆われた龍は、長い首をくねらせて、芭蕉の方に近づいてくる。

龍の目は長いまつ毛に縁どられており、驚いたように芭蕉を見つめる。

芭蕉はゆっくり腰を上げ、龍の顔の真ん前に立つ。

芭蕉・夜叉 「そなたは！」

M @ へ「そなたは。」テーマソング

(完)